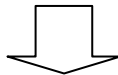


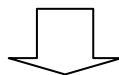
小中一貫教育について

小 中 接 続 の 課 題	<p>■ 中学入学時の生活・学習の大きな変化が、子どものストレスとなっている。 → 中1ギャップ……不登校や問題行動が中学1年で急激に増える。</p> <p>■ 6・3制導入時（昭和20年代前半）に比べ、子どもの心身の発達が1～2年早まっている。→ 小学校5、6年生の不安定化。（問題行動、学習意欲の低下）</p> <p>■ 小・中学校の教育課程がそれぞれで完結しており、小・中学校の指導の一貫性、系統性、指導方法の継続性に課題がある</p>
---------------------------------	---



現状では、小・中学校の「連携」を強化することによって対応

小 中 連 携 教 育	<p>◎連携を強化することにより</p> <p>【教員の交流】 小中学校教員の合同研修（学習・生徒指導・特別活動等）が進む。</p> <p>【子どもと教員の交流】 教員が相互に訪問する出張授業が可能となる。</p> <p>【子どもの交流】 行事や児童会・生徒会活動等を合同で実施できる。</p> <p>【子どもの学びの連続】 中学校にスムーズにつながり、生徒の学習が確かなものになる。</p>
----------------------------	---



小中一貫教育ならば

小 中 一 貫 教 育	<p>上記4項目についてさらに効果的な教育が進められる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校から中学校への急激な変化（学習面・生活面）を緩和しやすい。 ・ 小学校1年生から中学校3年生までの幅広い異年齢集団による、いろいろな活動が設定しやすいので、たくましい心と体、思いやりの心や責任感を育む効果が期待できる。 ・ 小学校教員と中学校教員が一体となって一人の子どもを指導できるので、学力向上等の教育効果が期待できる。 <p>— また</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 9年間を通したカリキュラムの実践により、発達段階に応じた計画的・継続的な教科指導及び生活指導がしやすくなる。 ・ 小学校から教科担任制を導入するなど、小中学校間における教科（算数から数学、英語など）の変化に対応しやすくなる。
----------------------------	--